

## イギリスのあたらしい大学

— サセックス大学 —

A New University in England

— Sussex University —

石田 洋一\*

Yoichi ISHIDA

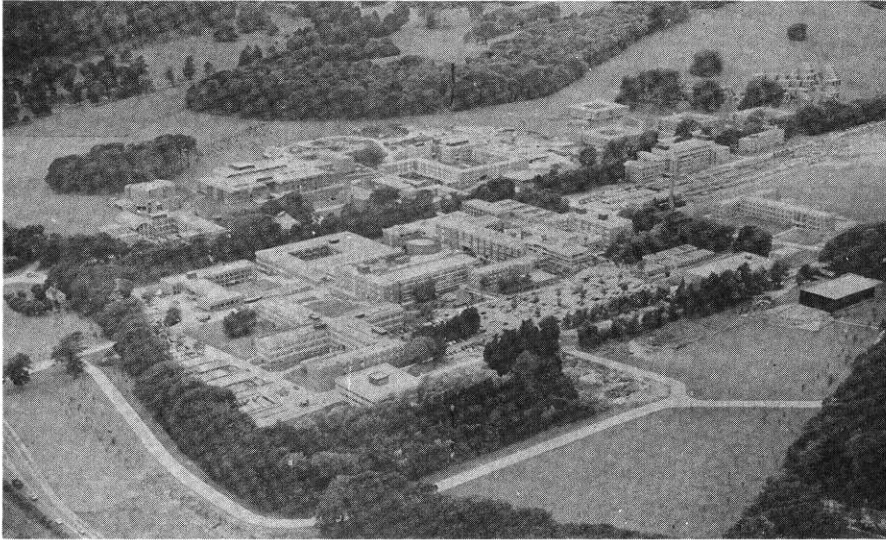


写真1 サセックス大学の全景

1976年10月のある朝、ディケンズの二都物語の冒頭の場面にてでくような乳白色の露の中を駅馬車ならぬ時代物の列車にゆられてロンドンをはなれた7人の東洋人があった。我ら調査団の一行である。あれこそ、そのあとにひきつづいた狂気の日々、連日の速記とレポート作成と時差ボケとの戦いの実質の幕上げであった。

ビクトリア駅を出て1時間、急に霧があがって窓外に日光がさしたとおもったら終着駅ブライトンである。ここはロンドンの南、ドーバーの白いガケが延々と続いてところどころ途切れている場所のひとつで海岸の保養地として名高いところである。霧があがったのも道理で、この地は年間の晴時間が英国中で最も長い英国きっての健康地である。サセックス大学はこの町の北方4マイル、サウスダウンとよばれる白亜質の丘陵を背にした牧場のような、というより本当に食堂の窓から牛の群れがみえるという環境にかこまれている(写真1)。訪問の世話をしてくれたのは材料科学専攻で応用科学部門の部長をしているCahn教授であるが、彼は同部門の教授であるWest(電気)、Bayley(機械)両教授をよんで午前中いっぱい我々の質問にこたえてくれた。サセックス大学

の説明だけでなく英国の大学の歴史や予算配分機関であるUniversity Grant Committee(UGC)やScience Research Council(SRC)の役割についても知ることができた。文中であるがCahn教授をはじめ参加した大学スタッフの好意に感謝し、彼らのあたらしい教育に対する熱意に敬意を表しておきたい。

## 1. 英国のあたらしい大学

オックスフォード、ケンブリッジ以来の歴史をはこる英国の教育にとっても20世紀は革命の時代であった。

(V.H.H. Green; "The Universities"ペリカンブックス1969)。1936年には両校とロンドン大学、バーミンガム大学などCivic Universityとよばれるものを含めて英国の大学は20校しかなかった。ところが、戦後、ロビンズ報告に代表される教育立国の主張がくりかえし勧告された結果、ロンドン大学の下にあったカレッジや工業専門学校23校が大学へ昇格し、サセックスをはじめとする7校が新設され、大学数は一挙に50校にふえたのである。現在人口約5千万人という英国に54万人の大学生がいる。このような学校数および学生数の急激な増加は多くの問題をひきおこした。とくに最近景気がわるかった工学分野では問題は深刻で、学生が社会科学方面へなが

\*東京大学生産技術研究所 第4部

れた結果工学全体として3,300人もの空席が生ずるという事態になってしまった(拙著, 生産研究 24, 12, p521 (1972)). 最近, とくに昨年度以降, 学生の応募は急増してもとに戻りつつあるというのが研究費の増加が激しいインフレに追いつかず, 大学院学生の給費が科学研究費に含まれる制度になっているために苦しい事態にあるということである。

## 2. UGC と SRC

UGC (University Grant Committee) は大学の運営費, SRC (Science Research Council) は研究費の分配をおこなう機関である。いずれも政府から独立していて, 大学と政府の間にとって所要経費をきめる役を担っている。詳細は報告書にゆずってここでは概略を述べる。

**UGC** 1919年, 大学への政府支出をアドバイスするために大学教授と民間からの委員が手弁当であつたできた委員会である。サセックス大学など, あたらしい大学の創設をきめたのもこの委員会である。配分額は主として学生の数できまってしまう。大学の自由裁量の許される部分と用途が指定された項目とがあり大学では委員会を設けて配分しているが, 最近の猛烈なインフレ(1昨年27%)にみあうだけの増加がないので極度に窮屈になっている。長期計画はインフレが10%を割るまで全部中止することになったという。

**SRC** 1965年, 政府からの研究費を分配することを目的に設立された。メンバーは $\frac{2}{3}$ が大学教授,  $\frac{1}{3}$ が民間の研究者である。3年の任期で交替する。人選の基準は

人望(reputation)であるが, きめ方は自分達にはわからないということであった。名簿をみるかぎり各校1名ずつでかなりバランスを配慮している。分配総額は1昨年度は85 Mポンド, 第1図は分配先を示してあり, ヨーロッパ国際研究機関であるCERNやESROへの分担金がかかなり大きい。大学へ配布されるのは25%にすぎない。それでも大学における研究費の主流はこれで, 大学院学生への奨学金, 施設への援助もこのなかに入っている。研究費の申請は年3回, 配分予定額の5倍くらいの応募があるが減額されるので件数としては採択率は半分以上である。普通3年継続で1件50~20Kポンド程度である。費用に大学院学生など研究に参加するスタッフの給料が含まれている。サセックス大学は教官の数のわりにはSRCが多いことが自慢だという。

## 3. サセックス大学の設立

サセックス大学はあたらしい大学7校のうちで最初にできたもので, このため質のよい教官を集めることができた。開校は1961年であるがブライトンに大学をつくらうという話は1911年からあったというから, いかにもイギリスである。ブライトンはイギリス王室の保養地でジョージ10世の強力な支持が得られたことが大きかったという。土地はもとチチェスター公が所有していたものを戦後ブライトン市が購入したもので, 大学はこれを999年間借用する契約をむすんでいる。ブライトンがなぜこんなに誘致に熱心だったかということ, 保養地であるこの町は, 夏休みにロンドンからやってくる人達のための安

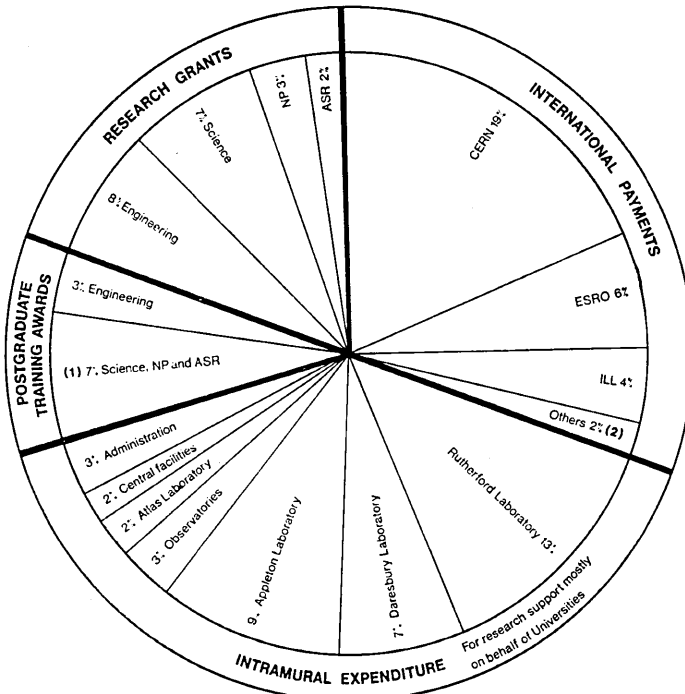


図1 SRCの支出内容(1975年度)

宿が主体であり、これがシーズン外に空室になるという悩みをかかえていたからである。英国という天候の悪い国では保養地でロンドンに近いという地の利だけでも学生や教官をひきつける魅力をもっているということであった。現在200エーカーの敷地に4,200人の学生を収容している。下宿の供給は、はじめのうちはうまくいったが学生数の増加にともない安い下宿の不足が顕在化し、今、資金集めに苦勞しながらキャンパスの北側に寮をつくっているということであった。

#### 4. 大学の組織

サセックスの特徴は学科制をやめたことで文科系の五つのスクール(studies)と理科系の四つのスクール(sciences)からなっている。

The Arts and Social Studies Schools

African and Asian Studies

Cultural and Community Studies

English and American Studies

European Studies

Social Sciences Studies

The Science Schools

Biological Sciences

Applied Sciences

Mathematical and Physical Sciences

Molecular Sciences

文科系も理科系もわけたははかなり異色といえよう。どうせ小さな大学だから細分する必要がないというだけでなく、せっかく歴史的拘束がないのだからオックスフォードやケンブリッジとはちがったゆきかたをしよう。境界領域をやりやすいようにしようというのである。組織名も職名もなるだけ別なものにして中味が変わることを期待したというから意気どみは大きかったのであろう。

#### 5. School of Applied Sciences

サセックス大学に工学部を設置する計画は当初すまなかったそうである。費用がかかりすぎるというのがその理由で、発足は1965年まで待たねばならなかった。設置目的も境界領域をやることが強調されており、以下に示すスクール内のテーマは流動的に教授個人の専攻分野という色彩がつよい。

Control and Electrical Engineering

Electronics, Electronic Engineering and Computer Science

Mechanical Engineering

Materials Science

Operational Research

Bio-medical Engineering

どうみても豪華メニューというには、ほど遠い分野構成

である。現在6人の教授の下に6人のreaderと25人のlecturerがいる。ほかに25人のresearch fellow。学生は学部280人、大学院80人、研究費は350Kポンドである。

#### 6. 応用科学部における学部教育の特徴

最初の2年間、(6学期)“コア・カリキュラム”と称する総合教育をおこなう。内容は毎年討議して、基礎として真に必要な内容を盛るようにしている。担当教官がきまっていてそれから内容をという形式的なものではない。2年目から選択科目(20コース中8コース選択)がはじまる。社会科学からも1科目、これはセミナー方式で夏休みに論文を書くことになっている。分野が最終的にきまるのは2年目の終りである。3年目は最終年でメジャーと称する専門コースの規定に従って聴講する。プロジェクトと称する実験があるのもこの年である。現在、機械系に100人、電気系に200人、材料系に50人程度の学部学生がいる。学部教育ではチューター制を重視しており、一人の教官に5人の学生がついて、2週間に1回会合する。現在問題になっているのは、コア・カリキュラムが終ってから、専門にはいるところで、教育内容が不連続なことで最近選択科目を2年目からとれるようにしたのはこれを配慮したものである。

#### 7. 大学院教育と研究

応用科学部は研究活動が盛んである。教官数に対する大学院学生の比率がたかいこと、UGCに対する外部研究費の比率が他の学部よりも大きく、しかも最近急増していることにこれが示されている。大きなプロジェクトとしてはJayawant教授の磁気浮上交通機関の研究(写真2)と、Bayley教授の伝熱流体力学のプロジェクトがある。特色があるのはSRC資金によるInter-University Institute of Engineering Control (IUIEC)プロジェクトである。サセックス、Warwick、North-Walesの3校共同のM.Sc.コースができていて、これに対し175Kポンドの予算でWarwickに大型計算機Sigma-5が設置され、サセッ

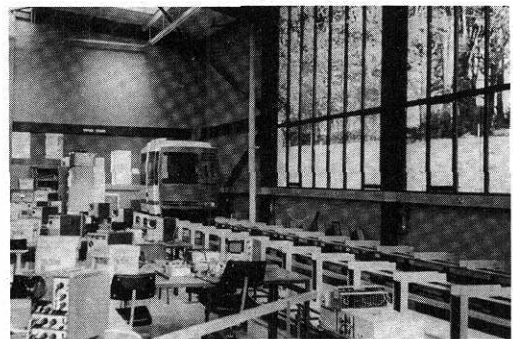


写真2 学生実験室にある磁気浮上車研究施設

クスはPDPGT 40でこれとつながっている。この M. Sc. コースは1975年、教官35名で設立されたコースで学生は各大学を8週間ずつまわって、母校にかえり6ヶ月プロジェクト実習をやって学位をもらうしくみになっている。SRC研究費の実情は3年間で33Kポンド程度で、これで平均して大学院学生を一人研究助手として雇い(3.5~4Kポンド/年)、Technician 一人の時間の半分、(6Kポンド/年)を支払っている。現在、工場には18人 Technician がいて、このうち12人が大学の雇い、6人はSRCの12のプロジェクトから給料をもらっている。このためには教官一人当たり2件程度はプロジェクトをとりつけなければならないということであった。

## 8. 学位制度

修士コースは上述の IUIEC および Operational research 部門の M. Sc. と通常の M. Phil. とがある。前者は1年間で、後者のように研究論文を仕上げない。博士コースは D. Phil. で通常3年だが4~5年かかる場合がある。D. Sc. はより高位の学位で、大学のメンバーで2年以上たった者などに与えられる称号である。これには大学の名誉がかかっている、たとえば Bayley 教授の肩書きはカタログに M. Sc., Ph. D. (Durham), D. Sc. (Newcastle) と、それぞれ大学名まで記してある。お会いできなかったが日本から留学している Inokuchi 博士は B. Sc. (Toyama), M. Eng., D. Eng. (Osaka) と経歴まですぐわかるように記されていた。

## 9. あたらしい大学の悩みと希望

この日の訪問を通じて色濃くにじみでてきたものは、イギリスをおお経済的逆境の影であった。これだけは大学といえども無縁ではありえないのである。上述したようにUGCからの資金は構造的インフレに追いつかぬままに長期計画を全て停止してしまっている。しかもっと重大なのは社会全体に、あたらしい大学をあまりにもたくさんつくりすぎたという否定的気分がひろがったことである。とくに工学は数年前に激しくみられた退潮傾向こそ止まったものの研究費ののびは決してよくない。このことはサセックスのように歴史の浅い大学にとっては影響が大きい。基本的装置がまだ充分備わっていないし、有望な研究が芽ばえてもこれを支援するような「よび水」的資金を手元にもっていないからである。問題はこれだけではない。今やイギリスのあたらしい大学の悩みは、このような外的、あるいはあたらしいがための悩みだけではなくてきている。サセックスはすでに創立15年をこえたのである。当時としては時代をさきどりした勇氣ある試みも今では一般化しているし、当時、集まってきた優秀な若手も今年年配の lecturer であり、昇任させ

るべき senior lecturer, reader などの上級ポストが足りないことがその士気にさしつかえるようになってきたという。上級ポスト数が少ないことはしかし、イギリスの教官制度の特徴であって、他校の上級ポストに抜てきされるようにどこの lecturer も努力していることであり、サセックスにもそれにあずかれない者がふえてきたことを意味する。建学期の特権は今や急速に消滅しつつあり、今後、この種の問題がふえてくることはさげられないだろう。このことをかんがえたとき私は正直いってあたらしい大学の将来の容易ならざるを感じないわけにはゆかなかった。

我々のこのような気持を敏感に感じとったか、Cahn 教授は、最後に我々を大学の礼拝堂に案内してくれた。礼拝堂といってもあたらしいものだから色ガラスをたくさんつけた小さな集会場にすぎないのだが、

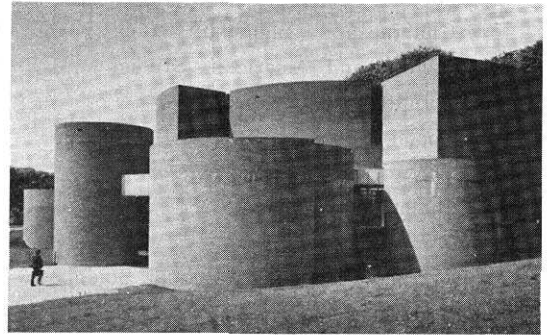


写真3 サセックス大学図書館

ちょうど、パイプオルガンが鳴っていて、それを伴奏に学生が一人トランペットを練習していた。幼い、あまりにも幼いという感じの若者であったが、彼が真剣な表情で吹奏をはじめたとき、私は、それまでの重苦しい気分が急に消失してしまったことを覚えている。音色の豊かさに魅せられただけではない。ここに希望があると感じたのである。私達は目前の問題に関心をもつあまり悲観的になって問題を反対側からみることを忘れがちである。学生がいるかぎり、学生の若い力と教官の探求心がからみあっているかぎり絶望ということはないのだ。少々のハンディキャップは克服して生長してくる者がどこからかきつとでてくるのだ、とこの若者によびかけられたように感じたからである。いくら環境がきびしくても、あたらしい大学の将来は Robins 報告の精神の否定という方向で閉じられるべきではないとおもうし、伝統的に大学を尊重する性格のつよいイギリス人は、きっとそのようなことはしないだろうと想いつつ暮れかかるキャンパスをあとにブライトン駅へひきかえたのである。

(1977年5月6日受理)